2018 年度 小委員会活動成果報告

（2019 年　1 月　31 日作成）

小委員会名	感覚・知覚心理小委員会	**主 査 名**：梅宮　典子 **就任年月**：2017 年　4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （環境心理生理運営委員会）	**委員長名**：岩田　利枝 **主 査 名**：西名　大作
設　置　期　間	2017 年　4 月　　～　　2021 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	・感覚・知覚心理分野の多様な研究成果を学会内外に向けて発信する。 ・建築環境工学の音・光・熱・空気等の各分野とその関連する分野の交流を図る。 ・シンポジウムを開催し、テーマに沿った議論を深める。発表者、聴講者の研究推進に寄与するとともに、実社会へ活用できる知見の社会的な発信を図る。 ・実験手法や評価法に関する研究会を開催する。初学者の研究推進に役立てるとともに、感覚・知覚心理分野の研究の裾野を広げる	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：　なし 主査：梅宮典子（大阪市立大学） 幹事：宮本征一（摂南大学）、 原田昌幸（名古屋市立大学） 委員：秋田　剛（東京電機大学）、合掌　顕（岐阜大学）、澤島智明（佐賀大学）、竹村明久（摂南大学)、竹原広実（京都ノートルダム女子大学）、土田義郎（金沢工業大学）西名大作（広島大学）、原　直也（関西大学）、松原斎樹（京都府立大学）、光田　恵（大同大学）、森原　崇（石川工業高等専門学校）、山中俊夫（大阪大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	新領域展望 WG：若手研究者を中心に構成し、学会内外における研究動向を把握する	
2018 年度予算	126,000 円	**ホームページ公開の有無**：　なし **委員会 HP アドレス**：　なし

項　　目	自己評価
委員会開催数	感覚・知覚心理小委員会：２回（年度内開催予定を含む） 新領域展望 WG：２回（年度内開催予定を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム･セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	１．第 1 回感覚・知覚心シンポジウム「時を経て移り変わる環境意識にどう向き合うか」（資料名）同上　参加者数　31 名 ２．第 2 回感覚・知覚心シンポジウム「ビッグデータ時代の統計と心理」（資料名）同上　参加者数　35 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	

目標の達成度 **（当初の活動計画と得られた成果との関係）**	１．目標とする年 2 回のシンポジウムを開催することができた。 ２．第 1 回シンポジウムは、環境意識の時代による変化という観点から建築環境工学の音・景観・熱・におい分野における研究を紹介し、討論によって分野間の交流を図り、感覚・知覚心理の多様な研究成果を学会内外に向けて発信することができた。また、環境意識に関する研究において使用されるアンケート調査と個人情報をテーマとする講演によって、初学者の研究推進に役立つ情報を提供し、感覚・知覚心理分野の研究の裾野を広げることができた。 ３．第 2 回シンポジウムは新領域展望 WG の若手研究者が中心となって企画し、ビジネス分野での活用が急速に拡大しつつある「ビッグデータ」が感覚・知覚心理研究にもたらす影響について心理学分野と疫学分野から最新の知見を紹介いただき、その後の質疑応答と討論によって、今後の感覚・知覚心理研究において避けて通ることができない新領域への認識を深め、参加者の研究推進に寄与することができた。
委員会活動の問題点・課題	１．シンポジウムには学生も多数出席したが、学生からの質問や討論への参加は少なかった。次年度の課題としたい。 ２．委員会の開催回数が少なかった。7 月に予定していた第 1 回シンポジウムは前日からの豪雨のため中止せざるをえなくなり、10 月に延期して開催した。その後時間の余裕がないまま、12 月には以前から計画していた第 2 回シンポジウムを開催することとなった。天候による事情とはいえ、結果として今年度はメールによる議論は重ねたものの、委員会の開催回数が少なくなってしまった。次年度は委員会の回数を増やし、時間をかけて議論をおこないたい。

2018 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	(A)　B　C　D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	本委員会では、建築環境工学の音・光・熱・空気等の各分野とその関連する分野を横断的に俯瞰することを主たる活動内容としている。さらに、近年のビッグデータや人工知能など、活用が急速に拡大しつつある情報技術の新領域が感覚・知覚心理研究にもたらす影響にも関心を持っており、若手研究者を中心とする新領域展望 WG が中心となって、分野をまたがる研究交流を行っている。 2018 年度は、当委員会の主催として 10 月と 12 月にシンポジウムを開催した。10 月は音・景観評価・熱の各分野から環境意識の時代による変化について発表して討論を行い、分野による環境意識の捉え方の違いについて理解を深めることができた。12 月は新領域展望 WG が主体となって疫学調査の専門家を招き、心理学分野が専門の委員による発表と合わせて質疑応答と討論を行い、「ビッグデータ」のイメージをつかむことができた。どちらも学生をはじめとして若い世代の参加が多く、活発で有意義な意見交換をおこなうことができた。よって委員会の活動目標である分野間の横断的交流の促進および感覚・知覚心理分野の研究の裾野の拡大の達成にむけて、成果をあげることができたと考えている。 2019 年度は 2 回のシンポジウムの開催を予定しており、テーマ設定など準備を進めている。一層の研究交流が期待できる。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。